

# 「開拓者の悲劇 ～真説・平家物語」

黒田裕樹（ブログ「黒田裕樹の歴史講座」）

## 1. 武士の誕生とその飛躍の背景

「祇園精舎(ぎおんしょうじゃ)の鐘の声、諸行無常(しよぎょうむじょう)の響きあり。娑羅双樹(さらそうじゆ)の花の色、盛者必衰(じょうしゃひっすい)の理(ことわり)をあらはす。おごれる人も久しからず、唯(ただ)春の夜の夢のごとし。たけき者も遂には滅びぬ、偏(ひとえ)に風の前の塵(ちり)に同じ」。

以上は、鎌倉時代に成立したと考えられている「平家物語」の有名な冒頭部分ですね。平氏の栄華と没落とを描いた軍記物として有名です。

それにしても、あれだけの権勢を誇った平氏が、なぜあっけなく滅亡してしまったのでしょうか。その理由を考える際、私たちは平家物語の冒頭のように「どんなに大きな権力を持っていても、いつかは必ず滅びるものである」という世の中の道理を思い浮かべることが多いです。

しかし、現実にはそんな生易(なまやさ)しいものではなく、物語の世界だけでは語りつくすことのできない、武家政権の「開拓者」ゆえの「悲劇」があったことを皆さんはご存知でしょうか。

今回の講座では、平清盛(たいらのきよもり)を中心とした、平氏にまつわる数々のエピソードや、隠された歴史などを研究することによって、平氏の栄枯盛衰(えいこせいすい)について探っていきたいと思えます。

さて、清盛の人生や平氏の栄枯盛衰を語ろうと思えば、なぜ平氏が台頭したのかを考えなければいけないだけでなく、それ以前になぜ平氏のような武士が天下をとったのか、あるいはなぜ武士と呼ばれる存在が誕生したのかについても探っていかなければなりません。まずはこの流れを簡単に説明しましょう。

平氏の棟梁(とうりょう)である平清盛が政権を握ったのは平安時代の末期ですが、そもそもこの平安時代が、名前とは裏腹に、地方を中心に国全体で争いが絶えなかった時代でした。

その原因の根本は、我が国直属の軍隊が廃止されてしまったことです。9世紀の初めまでに東北地方の蝦夷(えみし)を討伐して国内をほぼ統一した朝廷が、逆らう勢力も存在しないのに、費用のかかる軍隊を所有する必要はないと判断したからでした。

その後、朝廷周辺には現代の警察に相当する検非違使(けびいし)が設けられたことで、辛うじて治安

が守られましたが、地方においては、それこそ何の対策も行われなかったのです。

その結果、地方では盗賊を中心に力あるものが支配する世の中となったことで、数多くの生命や財産が奪われることになり、やがて人々が自らを守るために自然と武装するようになったことが、武士が誕生するきっかけとなりました。

治安が乱れた地方の中で、特に危険だったのは、各地の私有の荘園や国有の国衙領(こくがりょう)でした。豪族や有力農民たちは、外からの侵略に対抗するために集団で武装するようになり、やがては所領の秩序も維持するようになりました。これが武士団の起こりです。

こうして誕生した地方の武士ですが、武士団の形成に関しては、実はもう一つの理由がありました。当時は受領(ずりょう)と呼ばれ、徴税請負人として地方からの税を集める役人であった、国司(こくし)による「おいしい」職務にその原因があったのです。

国司の役割は一定の税を集めて政府へ送ることでしたが、これは定率の税さえ納めれば、残りは自分の取り放題となるということも意味していました。例えば、本来であれば20%の税を納めれば済むところを、50%をかき集めることによって、差額の30%をそのまま自分の利益にしてしまうことも可能だったのです。

このような「おいしい」国司には希望者が殺到し、貴族たちは様々な手段で国司などの役職を得ようとしていました。例えば、朝廷の行事や寺社の造営を請け負って、そのかわりに国司などに任じてもらうという成功(じょうごう)や、同じ方法で引き続き同じ国の国司などに任命される重任(ちようにん)などが盛んに行われるようになりました。

任じられるまでには大変な労力を必要とするものの、一度就任すれば莫大(ばくだい)な利益を得ることができた国司ですが、一定の年数が過ぎれば、任期切れのため都へ戻らなければなりません。しかし、その際に大きな問題を抱えることになりました。

国司たちは自己の任期中に、土地を開墾(かいこん)できるだけ開墾して巨利を得ましたが、任期中に開墾した土地を都へ持って帰ることはさすがに不可能でした。せっかく開墾した土地を他人に奪われるのは納得がいかないということで、任期が切れた後も地方にそのまま残って土着し、同じように武士となっていく者も現れたのです。

受領から土着した、貴族から武士となった者たちは、やがて各地の豪族が次第にまとまった地方武士団の中心となっていきましたが、その中でも特に有名だったのが、桓武平氏(かんむへいし)や清和源氏(せいわけんじ)の出身者たちでした。

10世紀から11世紀にかけて、平氏や源氏は様々な興亡を繰り返しましたが、12世紀に入ると、桓武平氏の流れをくむ伊勢平氏(いせへいし)が次第に頭角を現すようになり、清盛の祖父にあたる平正盛(たいらのまさもり)によって、平氏は大きく飛躍するきっかけをつかむのです。

## 2. 平氏を栄光へと導いた二つの乱

1107年、清和源氏の出身である源義家(みなもとのよしいえ)の子の源義親(みなもとのよしちか)が出雲(いずも、現在の島根県東部)で反乱を起こしましたが、翌1108年に平正盛によって滅ぼされました。

この功績によって、正盛は白河法皇(しらかわほうおう)の厚い信頼を受け、直属の警備機関である北面(ほくめん)の武士として登用されると、正盛の子の平忠盛(たいらのただもり)も、瀬戸内海(せとなくみ)の海賊を討ったことで白河法皇の孫の鳥羽(とば)法皇に信頼され、武士として初めて昇殿(しょうでん)を許されました。いわゆる殿上人(てんじょうびと)のことです。

忠盛は西国(せいこく)を中心に多くの武士を従え、平氏が繁栄する基礎をつくりましたが、昇殿(しょうでん)が許された武士の実力は留まることを知らず、12世紀半ば頃(きょう)に起きた二つの反乱によって、平氏が朝廷(ていてい)にかわって政治(せいじ)の実権(じけん)を握る道(みち)を切りひらくことになりました。

その背景(はいけい)には朝廷(ていてい)内の権力争い(けんりょくしがい)があり、またそれを上手(じょうず)に活用(かっくわ)した人物(にんぶつ)こそが「平清盛(へいせいせい)」だったのです。

この頃の朝廷(ていてい)では、摂関家(せつかんか)から政治(せいじ)の実権(じけん)を取り戻す(もど)ため、天皇(てんおう)を退位(たいい)した上皇(じょうおう) (出家(しゆけ)後は法皇(ほっほう))が子(こ) (あるいは孫(まご)) の天皇(てんおう)の父(ちち) (もしくは祖父(そふ)) として政治(せいじ)を後見(こうけん)するという院政(いんせい)が行われていました。

院政(いんせい)によって、上皇(じょうおう) (=法皇(ほっほう)) の地位(ちゐ)は「治天(ちてん)の君(きみ)」と称(な)されるまでになりましたが、その独裁(どくさい)的な政治(せいじ)手法(ていぽう)は周囲(しゅうい)の混乱(こんらん)をもたらすことになり、皇位(こうゐ)の継承(けいせい)に関しても例外(れいげ)ではありませんでした。

白河法皇(しらかわほうおう)は、孫(まご)の鳥羽(とば)天皇(てんおう)と藤原璋子(ふじわらのしょうし)との間(ま)にお生まれになった顕仁(あきひと)親王(せんのう)を大変(たいへん)可愛(こひ)がられ、親王(せんのう)が5歳(ごさい)になられた1123年に、崇徳(すどく)天皇(てんおう)として即位(きせき)させました。

祖父(そふ)の白河法皇(しらかわほうおう)によって無理(むり)やり退位(たいい)させられた鳥羽(とば)上皇(じょうおう) (のち法皇(ほっほう)) は、いつしか自身(みづか)の退位(たいい)の引き金(ひきか)となった我が子(わがこ)の崇徳(すどく)天皇(てんおう)に対して、良い感情(かんじやう)を持たれなくなりました。そんな中(なか)、1129年に白河法皇(しらかわほうおう)が崩御(ほうぎょ)され、鳥羽(とば)上皇(じょうおう)が待望(たいぼう)久しい「治天(ちてん)の君(きみ)」になりました。

鳥羽(とば)上皇(じょうおう)は藤原得子(ふじわらのなりこ)との間(ま)にお生まれになった躰仁(なりひと)親王(せんのう)を可愛(こひ)がられ、1141年に近衛(このゑ)天皇(てんおう)として即位(きせき)させ、崇徳(すどく)天皇(てんおう)を退位(たいい)に追い込みました。

しかし、近衛(このゑ)天皇(てんおう)は1155年に子孫(こそん)を残(のこ)されぬまま崩御(ほうぎょ)されました。次の天皇(てんおう)は、崇徳(すどく)上皇(じょうおう)の子(こ)である重仁(しげひと)親王(せんのう)が継承(けいせい)される可能性(かんのうせい)が高(たか)かったのですが、崇徳(すどく)上皇(じょうおう)の血統(けつどう)を嫌(きら)われた鳥羽(とば)法皇(ほっほう)は、崇徳(すどく)上皇(じょうおう)と同じ璋子(しょうし)との間(ま)にお生まれになった、上皇(じょうおう)の弟(あに)にあたる雅仁(まさひと)親王(せんのう)を、後(のち)白河(しろかわ)天皇(てんおう)として強引(きやういん)に即位(きせき)させました。

我が子(わがこ)である重仁(しげひと)親王(せんのう)が天皇(てんおう)として即位(きせき)しなければ、崇徳(すどく)上皇(じょうおう)は「治天(ちてん)の君(きみ)」として院政(いんせい)を行うこ

とができません。鳥羽法皇による冷酷ともいえる仕打ちに激怒された崇徳上皇は、1156年に鳥羽法皇が崩御されるとクーデターを計画され、兄の藤原忠通(ふじわらのただみち)と関白の座を争って敗れた藤原頼長(ふじわらのよりなが)を味方に引き入れられるとともに、自前の軍をお持ちでなかったので、武士である平忠正(たいらのただまさ)や源為義(みなもとのためよし)らと呼ばれ寄せられました。

しかし、崇徳上皇のお考えを先読みされた鳥羽法皇は、ご自身の崩御の前に後白河天皇や関白の藤原忠通に味方する武士団を準備され、ご自身の信頼が厚かった平忠盛の子であり、忠正の甥(おい)にあたる平清盛や、源為義の子である源義朝(みなもとのよしとも)らが参集しました。

こうして1156年7月、兄弟や親子、さらには叔父と甥という血族同士が争う事態となってしまいました。これを当時の年号から保元(ほうげん)の乱といいます。

この戦いは、機先を制して夜襲をかけた後白河天皇側が一日で勝利を収めました。崇徳上皇は出家されたものの許されずに讃岐(さぬき、現在の香川県)に流罪となられ、源為義や平忠正らは処刑されました。

1158年、後白河天皇は子の二条(にじょう)天皇に譲位され、自らは上皇として院政を開始されましたが、まもなく後白河上皇の近臣であった信西(しんぜい)と藤原信頼(ふじわらののぶより)との対立が激しくなりました。

一方、保元の乱の戦功によって平清盛や源義朝にも恩賞が与えられましたが、その差は歴然としていました。九州の大宰大貳(ださいのだいに)に任じられ、中国の宋(そう)とのいわゆる日宋貿易を行って経済的実力が高まった清盛に対して、義朝には十分な恩賞が与えられなかったばかりか、父である源為義を自らの手で処刑したことで、周囲から「父殺し」とさげすまれていたのです。

義朝は信西に不満を持っていた藤原信頼に協力して、1159年に清盛が熊野詣(くまのもうで)に出かけた隙(すき)をついてクーデターを起こし、後白河上皇や二条天皇を軟禁したほか、信西を追い込んで自害させることに成功しました。

しかし、急を聞いて京へ戻った清盛によって、後白河上皇と二条天皇とが脱出に成功されると、形勢は一気に逆転しました。清盛軍と戦って敗れた義朝は再起を期して逃亡中に襲われて死亡し、逃げ切れないと思った信頼は後白河上皇を頼って自首しましたが、最期には処刑されました。この戦いは、当時の年号から平治(へいじ)の乱と呼ばれています。

さて、平治の乱で非業の最期を遂げた義朝には多くの子がいましたが、長男の源義平(みなもとのよしひら)は処刑され、三男で当時14歳だった源頼朝(みなもとのよりとも)や、九男でまだ赤ん坊だった源義経(みなもとのよしつね)らが捕らえられて、清盛の前に引き出されました。

選挙という民主的な手段がある現代とは違って、昔は政敵とみなされた人物は本人のみならず、子供であろうが一族もろとも殺されるのが常でした。なぜなら、身内を殺されたことで残った恨みは消えることなく、当時の子供がそのまま大人になれば、復讐のために生命を奪おうとする可能性が

十分考えられたからです。

こうした原則からすれば、清盛によって捕らえられた頼朝や義経らの運命は風前の灯(ともしび)であり、処刑されてもおかしくないはずでした。しかし、清盛は結果として彼らの生命を奪おうとはしませんでした。なぜ清盛は頼朝や義経を助けたのでしょうか。

その背景には、二人の女性が存在していたのです。

清盛の母は早くに亡くなりましたが、継母にあたる池禅尼(いけのぜんに)が健在でした。池禅尼は、捕らえられた頼朝の姿を見て「若くして亡くした自分の子に似ているから」という理由で、清盛に対して頼朝の生命を助けるように頼みました。

はじめのうちは継母を無視して処刑しようとした清盛でしたが、池禅尼が「夫(=清盛の父である忠盛のこと)が生きていればこんなつれないことは言わないだろうに」と激しく抗議したため、仕方なく頼朝を伊豆(いず、現在の静岡県の一部)へと流罪にしました。

一方、赤ん坊だった源義経の場合は、義経の母であった常盤御前(ときわごぜん)が絶世の美女であったことで、御前が清盛の愛人となることを条件に義経が助命されたと伝えられています。

いずれにせよ、この時に頼朝・義経兄弟を生かしてしまったことが、やがては平氏の将来に暗い影を落とすことになるのですが、当時日の出の勢いであった清盛が気づくはずもないことでした。

### 3. 平氏政権に秘められていた「大きな欠陥」

さて、保元の乱や平治の乱によって朝廷内の勢力争いに武士の持つ戦闘力が利用されたということは、それを背景として、武士が積極的に政治に介入し始めたことも意味していました。

1160年、清盛は正三位(しょうさんみ)に昇進して、武士でありながら公家(くげ)の身分を得ることとなり、それまで貴族から見下されていた武士が初めて公家の仲間入りをし、彼らと肩を並べることになりました。後に清盛は、1167年には従一位(じゅういちい)の太政大臣(たじょうだいじん)にまで昇進します。

また、清盛は高倉(たかくら)天皇に自分の娘の平徳子(たいらのとくこ)を嫁がせ、二人の間に言仁(ときひと)親王がお生まれになると、親王が3歳の1180年に安徳(あんたく)天皇として即位させたことで、清盛は天皇の外祖父(=母方の祖父のこと)にまで出世しました。

清盛によって隆盛を極めた平氏の下には、全国各地から500以上の荘園が集まると同時に、平氏が支配を任された知行国(ちぎょうこく)の数も、全国の半数近くの30数カ所にまで拡大するなど、経済的な基盤も強化されました。

このような政治的・経済的な背景に支えられた平氏によって、我が国史上初めて武士が本格的に政

治の実権を握りました。しかし、その政権は清盛が天皇の外祖父になったり、平氏一門が次々と朝廷の要職に就(つ)いたりしたことで、摂関家のような貴族的な性格を持ったことから、平氏によるこうした権力の独占は、やがて周囲の大きな反発を招くことになるのです。

平氏による政権に反発する勢力の中には、後白河法皇もおられました。そもそもご自身の院政の強化のために武士を使っていたはずが、いつの間にかその武士に政権を奪われたことがご不満であられたのです。1177年、後白河法皇の近臣たちが京都の鹿ヶ谷(しがたに、現在の京都市左京区)に集まって平氏打倒の計略をめぐらしていましたが、事前に発覚して失敗しました。これを鹿ヶ谷の陰謀といえます。

陰謀の背景に後白河法皇の存在があったことを知って激怒した清盛は、2年後の1179年に軍勢を率いて後白河法皇を幽閉して院政を停止し、近臣たちの官職をすべて解くなどのクーデターを起こしました。なお、清盛の孫にあられる安徳天皇が即位されたのはこの翌年(1180年)のことです。

清盛の立場から見れば、自己の政権を危うくしたのは後白河法皇側であり、法皇のかわりに平氏と血のつながりのある天皇を立て、反対勢力を封じ込めて一門で官職を固めるのは当然の防衛手段といえました。しかし、法皇を幽閉するという強硬な手段が、周囲のさらなる反発を招いてしまったのです。

それに加えて、平氏による政権には自身が気づいていない「重大な欠陥」があり、その欠陥こそが後の平氏滅亡への直接的な引き金となってしまったのですが、それはいったい何だったのでしょうか。

カギを握るのは、この時代の「土地制度」です。

各地で武士が誕生し、その武装力を高めることによって、地方を中心に武士が世の中を支えるようになりましたが、そんな彼らには大きな悩みがありました。

平安時代の頃には、それまでの公地公民の原則が完全に崩壊して、荘園制度が全盛期を迎えていましたが、この制度には大きな欠陥がありました。それは、荘園の所有が上流貴族や寺社のみ認められていたということです。

実際に田畑を耕しているのは他ならぬ武士たちなのですが、朝廷は彼らの所有を認めようとしませんでした。困った武士たちは、仕方なく摂関家などの有力者に土地の名義を移し、自らは「管理人」の立場となりましたが、これほど不安定な制度はありません。

「自ら開墾した土地は自らの手で堂々と所有したい」。いつしか武士の多くがこうした切実な願いを持つようになりましたが、武士の心の内が理解できない貴族たちによって政治が行われている以上は、その願いは叶えられそうもありませんでした。

そんな折に、平氏が政治の実権を握ることに成功したことで、自分たちと同じ武士である平氏であ

れば、必ずや「武士のための政治」を実現してくれるに違いない、と全国の武士たちが期待したのです。

ところが、祖父の正盛の代から皇室や貴族と接することの多かった清盛には、「武士のための政治」がどのようなものであるかが理解できませんでした。明確なビジョンを持っていなかったゆえに、清盛は摂関家と同じやり方で政治を行う以外に手段がなかったのですが、結果的にこれが大失敗でした。

なぜなら、平氏が摂関家の真似をただけでは、武士たちの立場に全く変化がなかったからです。人間というものは期待が大きければ大きいほど、裏切られた場合の怒りが大きくなるものですが、この頃の武士たちの場合も例外ではなく、平氏への期待が大きかっただけに、「同じ武士なのに、なぜ俺たちの思いが分からないのか」と余計に不満を持つようになりました。

一方、それまで政治を行っていた貴族たちも、身分が低いうえに血を流す「ケガレた」仕事しかしないと見下していた武士である平氏が、自分たちの真似をしたことに対して激しく反発していました。すなわち、平氏の行った政治は、武士と貴族の双方から問答無用で拒否されてしまったのです。

源頼朝や足利尊氏(あしかがたかうじ)、あるいは織田信長(おだのぶなが)・豊臣秀吉(とよとみひでよし)・徳川家康(とくがわいえやす)など、後の世で武士による政治が広く支持されたという現実を考えれば、初めてであるがゆえに、確固たるビジョンを持たない「開拓者」としての立場でしかなかった平氏の悲劇でもありました。

武士として初めて政治の実権を握った平氏は、当時の国民の代表たる武士たちの共感を得ることができませんでした。いくら武力など強引な手段で世の中を統治したところで、国民の理解が得られなければ、その支配は絶対に長続きできないのです。

平氏の場合も決して例外ではなく、やがて「武士のための政治」を実現させる他の勢力が現われたことで、全盛期には「平家に非(あら)ずんば人に非(あら)ず」とまでいわれた平氏の天下が、あっという間に崩れ去ってしまいました。

では「武士のための政治」とは一体どのようなものなのでしょうか。そして、平氏にかわって政治の実権を握った勢力には、なぜ「武士のための政治」が理解できたのでしょうか。

そのカギを握る人物こそが、かつて清盛が生命を助けた源頼朝なのです。

#### 4. 頼朝の台頭と平氏の滅亡

平治の乱の後、池禅尼によって生命を助けられた頼朝でしたが、流人(るにん)という身分での伊豆での暮らしは決して楽ではありませんでした。

しかし、伊豆で様々な体験を積み重ねることによって、頼朝は武士たちの日常の生活やその願いな

どがよく分かるようになっていました。

要するに、頼朝は若い頃に武士としての「実地訓練」を積んでいたのです。やがて頼朝が 1180 年に平氏打倒に立ち上がると、当初は苦戦したものの、次第に武士たちの同意を得て、富士川(ふじかわ)の戦いで勝利するなど大勢力となっていきました。

なぜなら、平氏に一度「裏切られた」かたちとなった武士たちが、自分と同じ経験をした頼朝であれば、今度こそ期待に応えてくれるに違いないと判断したからです。

一方、頼朝をはじめ各地の源氏の挙兵に危機を感じた清盛は、1180 年 6 月に平氏の経済的な本拠地である福原(ふくはら、現在の兵庫県神戸市)に都を遷(うつ)しましたが、余りにも性急に行ったことで皇族や貴族、あるいは寺社の反対が根強く、結局 11 月には京都に戻ることになりました。強引な手法で体制を固めてきた平氏の政権も、この頃には蔭(かげ)りを見せていたのです。

どんなに大きな勢力であっても、人材が育たなければいつかは必ず衰えますし、不可抗力な事態が起こった場合には、人々の恨みは時の政権に向けられます。平氏の政権も例外ではなく、末期になると立て続けに不運が襲うようになりました。

まずは人材不足が平氏を悩ませました。清盛の長男で将来を期待されていた平重盛(たいらのしげもり)が、父に先立って 1179 年に 42 歳で亡くなり、娘婿(むすめむこ)にあたり、院政を行われるはずだった高倉上皇も 1181 年 1 月に崩御されました。

そして何よりも最大の不幸だったのが、清盛自身が病気となって 1181 年閏(うるう)2 月に 64 歳でこの世を去ってしまったことでした。清盛の死後は三男の平宗盛(たいらのむねもり)が平氏の棟梁(とうりょう)となりましたが、清盛ほどの器量は持っておらず、また後白河法皇が院政を再開されたこともあって、平氏による政権の将来に暗雲が立ち込め始めましたが、その原因は人材不足だけではありませんでした。

平氏に逆らった勢力には寺社も含まれていました。平氏は 1180 年 12 月に奈良の東大寺や興福寺(こうふくじ)の寺社勢力を鎮圧するため出兵しましたが、風の強い日に攻めたために火が燃え広がり、東大寺の大仏が焼け落ちるといふ大惨事となったことで、平氏は「仏敵」呼ばわりされてしまったのです。

さらに平氏を待ち受けていたのが大飢饉(だいききん)でした。1180 年は異常気象に悩まされたこともあって農作物が不作となり、西日本を中心に餓死者(がししゃ)が相次いだばかりか、この状態が数年も続くという騒ぎになりました。これを当時の年号から養和(ようわ)の大飢饉といいます。

仏敵となったのは火の勢いがたまたま強かったのが理由であり、ましてや大飢饉の責任が平氏にあるはずもないことです。しかし、当時の人々は「飢饉は大仏を焼いたタタリであり、すべての原因は平氏にある」と固く信じており、平氏への恨みの声がますます高くなりました。

そんな中、源義仲(みなものよしなか)が1183年に倶利伽羅峠(くりからとうげ)の戦いで平氏の軍勢を破ると、身の危険を感じた平氏は、安徳天皇とともについに都落ちをしてしまったのです。

しかし、備中(びっちゅう、現在の岡山県西部)の水島(みずしま)では義仲相手に大勝するなど、本拠地である西国において平氏はまだまだ力を持っており、都での復権を虎視眈々(こしたんたん)と狙っていました。

また、瀬戸内海がある西国では海戦が多く、東国の山育ちの人間が多い源氏に対し、強力な水軍を持っている平氏の優位は動きませんでした。このようなことから、平氏と源氏との戦いは当分の間は一進一退を繰り返すであろうと思われていました。

ところが、結果として平氏は都落ちからわずか2年足らずで滅亡しているのです。どうしてこのようなことになったのでしょうか。

そのカギを握る人物こそが、頼朝と同様に清盛が助命した源義経なのです。

都落ちした平氏を追討することを決意した頼朝でしたが、どちらかといえば政治家向きだった彼は鎌倉で内政に専念し、代わりに弟である源範頼(みなものりのより)や義経に戦わせましたが、いつしか義経が戦いの指揮をとるようになりました。

1184年3月、一ノ谷(いちのたに、現在の神戸市)に陣を敷き、山を背後に軍勢を構えた平氏は、正面から攻めてくるであろう源氏を迎え撃つべく待っていたのですが、義経は山の頂上から、急斜面のため常識では通れそうもない坂を馬ごと一気に下り、平氏の背後を奇襲しました。

不意をつかれた平氏は大混乱となり、一ノ谷を放棄して西へ敗走せざるを得ませんでした。義経の思わぬ奇襲によって源氏が勝利を得たこの戦闘は一ノ谷の戦いと呼ばれ、また義経が急坂を一気に下った戦いぶりは、後の世に「鶴越(ひよどりごえ)の逆(さか)落とし」と称えられました。

義経には常識にとらわれない思考能力と、一瞬のスピードで決着をつけようとする天才的な戦術に関する能力がありました。義経という戦争の天才を得た源氏と、人材不足に悩む平氏との大きな差が、それぞれの今後を象徴していました。

一ノ谷を放棄した平氏は、屋島(やしま、現在の香川県高松市)に本拠をかまえて四国を確保しようとしていました。屋島の北側には瀬戸内の海が広がっており、平氏は源氏が当然海を渡ってやって来ると思い、待ち伏せして全滅させようと考えていたのです。

ところが、ここでも義経が自慢のスピードで奇襲をかけてきました。1185年2月、義経は嵐の中を少数精鋭の騎馬武者とともに荒海を馬ごと船出しました。通常なら難破してもおかしくないのですが、歴史の神様を味方につけた義経は、嵐を追い風に、極めて短時間で上陸を果たすことができました。

上陸した義経軍は、海岸伝いに浅瀬を馬で渡って屋島の背後に回り、安徳天皇がおられた御所を急

襲しました。またしても義経に不意をつかれた平氏は、天皇を死守するためにも逃げる以外に選択肢がなく、屋島も放棄せざるを得なかったのです。なお、この戦闘は屋島の戦いと呼ばれています。

ちなみに、源氏の武者である那須与一(なすのよいち)が、平氏が所有する船に立てられた、日の丸が描かれた扇の要(かなめ)を見事に射抜いたという、平家物語の有名なエピソードはこの際のもので、このエピソードこそが、後の平氏の運命を物語っていたように思われてなりません。

屋島を放棄した平氏は、それ以前に山陽道や九州の大宰府(だざいふ)も源氏に抑えられていたことによって、本州と九州とを結ぶ関門海峡沿いの壇ノ浦(だんのうら、現在の山口県下関市)に追いつめられてしまいましたが、壇ノ浦での戦いは完全な海戦となるため、経験豊富な平氏にはまだ希望が残っていました。

それに比べ、本格的な海戦の経験のない源氏の不利は大きく、さすがの義経も苦戦するかと思われたのですが、いざフタを開けてみれば義経の完勝で終わりました。1185年3月に行われたこの戦闘は壇ノ浦の戦いと呼ばれていますが、なぜ義経は未経験の海戦で勝つことができたのでしょうか。

実は、義経は平氏の軍船の操縦者をことごとく射殺することにより、敵の船を動けなくしてしまったのです。船の操縦者は殺してはいけない、というよりそもそも戦いに参加していないというそれまでの常識を打ち破る、まさに「コロンブスの卵」的な義経の柔軟な発想でした。

船が動かなくては勝てるはずがありません。平氏側の武将も奮戦して一時は義経を追いつめ、この際に義経が八艘(はっそう)飛びで難を逃れるという場面もありましたが最終的には敗北し、あれほどの栄華を誇った平氏にも最期の時がやって来ようとしていました。

壇ノ浦の戦いの敗北で死を決した清盛の妻の二位尼(にいのあま)は、乗っていた船上でまだ8歳と幼かった安徳天皇を抱き寄せ、三種の神器の宝剣と神璽(しんじ)を身に着けました。

抱き上げられた安徳天皇が「私をどこへ連れて行くのか」と問いかけられると、二位尼は涙ながらに「弥陀(みだ)の浄土へ参りましょう。波の下にも都がございます」と答えて、安徳天皇とともに海に身を投じました。

その後、平氏一門の女性や武将たちも、安徳天皇に続くかのように次々と入水(じゅすい)しました。生き残った武将も源氏に捕えられてそのほとんどが処刑され、平治の乱の勝利以来、約25年続いた平氏による政権はついにその幕を閉じたのです。

「祇園精舎(ぎおんしょうじゃ)の鐘の声、諸行無常(しよぎょうむじょう)の響きあり。娑羅双樹(さらかうじゆ)の花の色、盛者必衰(じょうしゃひつすい)の理(ことわり)をあらはす。おごれる人も久しからず、唯(ただ)春の夜の夢のごとし。たけき者も遂には滅びぬ、偏(ひとえ)に風の前の塵(ちり)に同じ」。

哀切極まる平氏の最期には、万感胸に迫るものがありますね。

こうして武士による政権を初めて実現した平氏は滅亡しましたが、その流れを受け継いだ源氏によって鎌倉幕府が成立しました。つまり、平氏の滅亡後も武士による政権は続いており、しかも本格化しているのです。

源氏や北条氏、あるいは足利氏や徳川氏といえども、当時の国民（あるいは武士）の支持を受けていたとはいえ、平氏と同じ武家政権であることに変わりはありません。それなのに、彼らの政権は平氏と違って長く続きました。

その理由として考えられるのは、それぞれの政権が前任者の「失敗」を教訓としてきたということです。その具体的な内容について今回は省略しますが、人間というものはそもそも失敗から成長するというを考えれば、それも道理ではあります。

ということは、人間は前例のないことに関しては戸惑うとともに、失敗すれば大きく反発するものでもあるということです。我が国で初めて武家政権を樹立した「開拓者」であった平氏は、それゆえに滅亡するという「悲劇」を経験することになったのですが、彼らの足跡はその後の我が国の繁栄には絶対に欠かすことができません。

我が国の歴史における大きな流れに偉大な功績を残した平氏の生き様を学ぶことで、私たち自身が人生の幅を広げるとともに、次代に未来を託せるような日々を送りたいものですね。（完）

主要参考文献：「逆説の日本史 4 中世鳴動編」（著者：井沢元彦 出版：小学館）  
<http://www.shogakukan.co.jp/books/09379415>

「逆説の日本史 5 中世動乱編」（著者：井沢元彦 出版：小学館）  
<http://www.shogakukan.co.jp/books/09379416>

YouTube 再生リスト「真説・平家物語」  
<https://www.youtube.com/playlist?list=PLeZrZWY-wML4KBukjuRGDp8SQE7tTUFdP>

黒田裕樹の歴史講座  
<http://rocky96.blog10.fc2.com/>